

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780523

研究課題名(和文) ジェンダー視点から見た家庭科教育の現状と課題

研究課題名(英文) Present Situation and Problems of Sexuality Education in Home Economics

研究代表者

良 香織 (USHITORA, Kaori)

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：10459224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はジェンダーの視点から家庭科教育の現状と課題を確認し、展望を明らかにすることを目的として行われた。結果、戦後～1989年の学習指導要領に対応した高校教科書では、民主的な家族の基盤としての女子特性教育が強調された時期、女子のみ必修によって、就業による経済的自立を希望する女子にも特性教育を定着させようとした時期、高校は女子のみ必修のままだが内容を変化させつつあった共修への移行期、男女共修によって、ジェンダー平等を意識した記述が増える時期に区分し、聞き書き調査と対応させたが、性規範や家族等の内容と対応した語りは見られていない。課題として以降を含む内容編成に注目した分析が残された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify the current status and issues of home economics education from the gender perspective, and reveal its vision. As a result, it was suggested that high school textbooks of home economics education, which complied with the ministry's curriculum guidelines from post-world-war-II to 1989, were divided into four phases: 1) a phase that girls' attribute education was emphasized as a base of a democratic family, 2) a phase that attempted, by making home economics education compulsory only for girls, to establish attribute education for girls who wished to seek economic self-reliance by getting a job, 3) a transitional phase that, while it was still a compulsory course only for girls in high school, attempted to change its content to more cross-gender education, and 4) a phase that, by implementing co-ed course of home economics education, increased literature aligned with gender equality. The oral interview research was conducted according to these phases.

研究分野：Education

キーワード：Sexuality Education

## 1. 研究開始当初の背景

家庭科はあらゆる多様性を前提としたジェンダーの視点で生き方を捉えなおす唯一の教科であると言ってもよい。しかしながら家庭科教育が、多様な生き方を学ぶ教科として位置づいているとは言い難い。未だに家庭科に関するイメージは調理や被服といった実習教科、もしくは「息抜き」の教科で、女性教員が担当するという印象が強いことが指摘されている。こうした教科に対するイメージは、家庭科の成立過程やこれまでの歴史にも影響されていると言える。

家庭科は長年にわたって、男女特性論に基づく教科として位置づいてきた。その象徴的なものが約30年にわたって継続されてきた、高校における男女「特性論」に基づく女子のみ必修の家庭科であろう。1989年の学習指導要領改訂になってようやく家庭科は共学化した。未だ家庭科教育の内実において、その内容や方向性について、分離主義的な面があることは否めない。

また、女性差別撤廃条約批准のために実現した家庭科の共修が、ジェンダー平等の実現にどのように寄与できているのかと検証は、家庭科が子どもや若者の自立を支える教科となるための具体的課題を明らかにするためには不可欠であるにもかかわらず、教員の質的調査や教材の詳細な分析・比較などによってそれを実証的に明らかにしようとする研究は少ない。

## 2. 研究の目的

家庭科教育の実態をジェンダーの視点から分析し、家庭科が、多様な生き方の学びを視野に入れた、子どもや若者の自立を支える教科となるための具体的課題を明らかにすること、さらに教科としてどのような形で発展しうるかその展望を明らかにすることが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 授業実践の質的調査:

戦後の教科書分析、関連資料分析、教員を対象とした質的調査

### (2) 教員養成課程の大学生における多様なライフスタイルに関する量的調査

### (3) 韓国、台湾の家庭科関連教科の教材分析

### (4) その他:

関連した国際文書(国際セクシュアリティ教育ガイドライン、台湾ならびに韓国における性教育指針、人権教育指針等)の翻訳、分析

## 4. 研究成果

本研究は分析作業を継続して行っているが、すでに多くの知見が得られつつある。

まず教科書にジェンダー/セクシュアリティに関わる内容の特徴を整理した。1947年3月20日『学習指導要領一般編(試案)昭和二十二年度』において新学制の教育課程が公表され、家庭科が新設された。民主的家族関係に基づいた家庭や社会を築くために男女ともに学ぶ教科として、教育課程表上では教育の機会均等が図られたが、設立当初からの教科理念の矛盾や脆弱さは今に続く課題である。家庭科の教科書を分析すると次の時期に区分することができた。

民主的な家族の基盤としての特性教育の時期(1956年~64年)

教科書のジェンダー/セクシュアリティに関わる内容は、項目の中でも家庭経営と保育に含まれている。民主的家族の創設のための性といいながら、個別交際より集団交際を重んじる等といった純潔教育であり、より良い家族を創るために遺伝の記述等、優生学に通じる内容となっている。これは1948年優生保護法の施行からの影響もある。生活時間調査において、性別役割分業は前提であるが、女性の労働者の記述がわずかながら登場している。保育に関しては社会システムや社会的養護という視点は一切見られず、母親の保育責任が強調されている。しかし家族観は変化の過渡期にあることが明記されている。

女子のみ必修化による特性論の定着期(1963年~75年)

純潔教育、特性教育が制度的にも完成する時期である。いくつかの教科書「まえがき」等に女子必修の根拠として家庭経営の担い手が女性であることが強調されている。一方で女性の労働が増加する時期でもあることから、就業女性も登場しているものの女性が働くことが保育にどのような弊害があるかが書かれてあり、わずかながら制度の不十分さを指摘している。女性は仕事と家庭を両立することを基本としており、幸せな結婚の条件として健康、遺伝等を重視している。健康条件の中で梅毒予防には「純潔思想の徹底」があげられている。家庭経営の内容は主に主婦のサポートの重点をおいたものとなっている。

共修化に向けた教科の位置づけや内容の拮抗期1973年~84年

と教科書の内容は大幅には変わらないものの、国際的な潮流からの影響も相まって実態とのギャップが強まり、教科そのものの位置づけと内容が揺らぎ始める時期である。1982年度の教科書が検定合格以降は、女子のみの時の内容から共学を見越した内容へと変化が見え始める。

男女共修による成熟期(1982年~96年)

1987年から高校の男女共修が実現され、「青年期の愛と性」が加わり、具体的にジェ

ンダーバイアスを問い直す内容や社会システムに関わる内容が充実する。また国際的な条約や宣言の条文(一部)が裏表紙や参考として加えられている。 - に特徴的であった家庭経営の担い手としての個人から、個人のライフスタイルをベースとした内容にシフトしていく時期である。しかし保育や家庭と結び付けた項目に高校生の性(とりわけ女性)に関わる内容が位置付けられている点、家庭を創り子どもを育てることをベースとしつつも、近代家族「外」の家庭や家族のあり方に関わる記述、制度の現状と課題が具体的にふれるような記述が表れるのがこの時期の特徴であろう。具体例としては、離婚率や「片親だけの世帯」、核家族の増加等の家族の変化、人工妊娠中絶の記述が現れている。また子どもの権利条約が記され、児童福祉の必要性が加えられている。また女性の社会進出や少子高齢化といった社会問題に対応した内容が増えている。

バッシングによる後退と多様化へ向けた時期(1994年~05年)

2000年前後から本格化した性教育バッシング、男女共同参画へのバックラッシュの影響もあり、教科書の検定意見は厳しいものであった。とりわけ1996年の教科書検定では13本中4点が不合格となったが、多様な家族・家庭を記述した内容に意見がついている。それでも国際的な条約や多様な家族に関わる記述は具体的なものとなっている。結婚も個人が生き方を選択していくうえでの選択肢のひとつであり、家族も多様な個を軸としたトーンに変わっている。中半からは非婚化や離婚、事実婚や海外のPACS法等の同性同士のパートナーに関わる内容が加わり、後半からは性別自認や性指向、DVの内容が入る。中から後半にかけては「子どもを権利行使の主体」とする内容が含まれる

2005年~現在は分析作業中である。 - の結果は、保健体育の内容と、同時代に高校に在籍していた者を対象とした質的調査と関連づけて考察を深めた。性教育、性規範や家族等では家庭科と関連づけたスクリプトは得られていないことから、内容編成に注目する必要があることが確認された。

続いて大学生の量的調査では家族観や多様性の捉え方について分析を進めている。また台湾や韓国の教材分析においては人権教育、家族、保育等の政策との関係、また民間団体との連携を軸に特徴をまとめている。

分析にあたって、各種国際文書の翻訳を行ったが、とりわけユネスコの『国際セクシュアリティ教育ガイドライン』は、本研究の目的である今後の家庭科教育の方向性を考える上でも基礎資料として有用であるが、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

良 香織,  
家庭科教育における性教育,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 61, 68-75p, 2013年

良 香織,  
家庭科教育における性教育 インタビュー調査をもとに,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 62, 86-93p, 2013年

良 香織,  
家庭科教育における性教育,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 63, 88-96p, 2013年

良 香織, 田代美江子, 渡辺大輔,  
ジェンダー・バイアスを問い直す授業づくり: 「性の多様性」を前提とする中学校の性教育  
埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 91-98p, 2014年

良 香織,  
家庭科教育における性教育,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 66, 86-93p, 2014年

良 香織,  
家庭科教育における性教育 家庭科でどのような性教育を展開できるのか(3)小学校~高校における家庭科の性教育のポイントと課題,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 68, 108-115p, 2014年

良 香織,  
海外情報 台湾レポート(2)台湾性別平等教育協会,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 69, 134-137p, 2014年

良 香織,  
性教育バッシングとは何だったのか,  
性の健康, 性の健康医学財団, 13(2), 38-41p, 2015年

良 香織,  
人間の尊厳を大切にする性教育を,  
SEXUALITY, エイデル研究所, 71, 12-23p, 2015年

良 香織,  
基盤科目「男女共同参画社会を生きる」にお

ける人権教育の試み,  
教育学研究室紀要「教育とジェンダー」研  
究,12,107-110p,2015年

Kaori USHITORA et al  
School education and development of gender  
perspectives and sexuality in Japan.  
Sex Education:Sexuality and Learning  
17,386-398p,2017(査読付)

良 香織他  
子どもを見つめる、「家族」を学ぶ,  
SEXUALITY,エイデル研究所,76,6-23p,  
2016年

福田 弘、良 香織  
性教育も人権教育の基盤の上で,  
SEXUALITY,エイデル研究所,77,79-90p,  
2016年

〔学会発表〕(計2件)

Kaori USHITORA  
What Was the Anti-Sexuality education  
Movement?  
Gender and Education Association  
Conference,  
2016年6月13日,Sweden

Kaori USHITORA et al  
A Practical Study on Comprehensive  
Sexuality education with an emphasis on  
Student Activities.  
Asian Congress of Sexuality Education,  
2016年8月6日~8日,Taiwan

〔図書〕(計4件)

望月一枝,良 香織他  
生きる力をつける学習 未来をひらく家  
庭科,教育実務センター,208p,2013年

橋本紀子,良 香織,田代美江子他,  
ハタチまでに知っておきたい性のこと  
(大学生の学びをつくる),大月書  
店,185p,2014年

吉川はる奈,良 香織他  
児童学事典,640p,2016年

橋本紀子,良 香織,田代美江子他,  
ハタチまでに知っておきたい性のこと(大学  
第2版 生の学びをつくる),大月書  
店,200p,2017年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

良 香織 (USHITORA KAORI)  
宇都宮大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 10459224